

## 尾張藩海防史料「赤心秘書」についての紹介・翻刻④

長 屋 隆 幸

## はじめに

尾張藩海防史料「赤心秘書」巻二「御治世久敷諸人奢侈困窮相成候事」から巻三「御賞美之品之事」までを引き続き翻刻した。なお、旧字・異体字は原則常用漢字に直した。また、合字は開き、欠字は一字明け、台頭・平出は二字明けとした。

## 翻刻

一御治世久敷候へハ諸人奢侈ニ成諸国共ニ困窮ニ成もの、よし申候、何様私之若キ時分ハ当時之ことく困窮之様子ニも不承候処、近年ニなり諸国共詰り不模通りニ成候故、無余儀士ニ有間敷事も致ねはなりかたく、或ハ筋なき内職をいたし候故夫レニ連れて士之志昔と違ひ野鄙ニ相成候而、毎日売買之事ニ而、心ハ町人之ことく相成申候、是又御軍用ニ御志響申候事ニ奉存候

一巾下御門外松林之辺ニ而者夜分追落し有之、女之持行候風呂鋪包を奪、或ハ櫛笄を抜候、或ハ町家へ入其見せに有ものを取かくし袂へ入、格子窓をはつし候類皆以御家中若き輩ニ候、前々ハ夏之内辻切をいたし候故ニ夜廻り被 仰付、今以夏之内夜廻り有之候、冬ハ夜廻り無之候、辻切などいたし候事ハまた士之志有故ニ候、今ハ小盗人ニ成候、成程御慈悲之姿程難有事ハ無之候へとも、如此人物之者ハ嚴

敷御吟味被 仰付急度御沙汰之有之様ニ仕度ものニ奉存候、巾下御門は東都ニ不申候ハ、和田倉御門平川御門ニ候、然るに其辺ニ如斯不都合成事有之候事ハ畢竟諸番所廻り御足輕之守り方ゆるかせ之故ニ候、御門番辻番廻り御足輕も又其者を見廻り候、御目付之類度々不相廻候而者不相成候、とかく東都之ことく嚴重ニ無之御当地者守方甚以怠り見苦敷、且ハ御不用心ニ奉存候

一古書ニ御法をゆるくして人を罰す罪是より大なるハなしと有之候、御法ハ嚴敷なくてハ不宜候、御門ニて其外も守方をゆるかせニ致し怪敷者を見ても先ハ其通ニいたし直塵防之北土居ニ腰を懸御城を見て居候者も廻り之者不見顔をして通り候様成事ニなり候而ハ、畢竟大キ成盜賊共御郭内へも入るへき基ニ奉存候、如此事も実に武備を思い入れ候御役人方無之故に候、武之本と可致事ハ戦闘之事より先常々守を重ニ不致候而者難成候、前件申上候様なる盜賊同前之所行之者ハ無猶予召捕御吟味被 仰付、諸士ニ有間敷所行ニ候ハ、死罪ニ被 仰付候程なくてハ若き輩も悪業直り申間敷候、右之様成者ハ必火を付候ものなれハ、己か家に火を付及大火候ハ、巾下辺ハ御城近之儀ニ候へハ如何様成御大事ニ可相成候も難計奉存候、乍然甚歎敷事ハ諺ニ申貧之盜ニ而、

至而困窮故ニ如斯事も出来仕候、愚意ニ奉存候ニ者夏之内之夜廻りハ無之候而も、冬ニ成夜廻り無油断候様ニ仕度御儀ニ奉存候、巾下枳穀通り之辺ハ至而御本丸へも近く、東都ニ而申上候ハ、竹橋御門内或ハ平川辺ニ而候へは、非常之御守方ハ少も怠りては不相成候哉ニ奉存候、東都半蔵御門より竹橋迄之間西隅ニハ大辻番と申候而急度致候御番所有之、御旗本衆御勤歎とも奉存候、是ハ此方ニ而申候ハ、巾下紅葉矢来之外ニ而、西北角故ニ大事之御場所故ニ御門も無之候処ニ大辻御番所有之候、御当地も巾下辺ハ御念之入候様ニ奉存候

(朱書)

「東都ニ之丸火事之節松平丹波守殿格別之御誉之事」

一前々東都ニ之丸より出火ニ而諸大名衆格別ニ御働候而御誉も有之候、其内ニ分而御誉有之候ハ信州松本之城主松平丹波守殿ニ候、是ハ其前年之詰ニ西丸大手之御番被相勤候故ニ其年之詰ニ者御門番御火消等之御役儀も不被 仰付無役ニ而被相詰候、然処ニ之丸より出火致といなや急ニ人数を揃へ登城被致御大切之御場所之火事ニ付私人数召連罷出候、御用等被 仰付被下候様ニ御老中方迄被申上候処、直ニ達(小文字)「先達御詰所之火事ニも大勢之御家中ニ誰一人非常之心得を致人数召連て出候輩無之候、誠ニ以是程大事之火事ハ無之、南風強く候ハ、直ニ御本丸へ吹付可申候、然れ共余所之事之様ニ成行候事恐入奉存候」上聞候処、尤之旨 上意ニ而御城内之御固メ被 仰付、翌日働候大名衆不殘被 召御誉之上意有之候処、丹波守殿御時服一重被下、当年ハ無役ニ候処早速人数召連罷出候之段常々心懸宜敷故ニ候、譜代之者者左も可有之事ニ候へ共、無役之節ハ先ハ其心得無之候処、格別之働

候旨 上意有之候、御家ニ而も御役米代金を出し候とて召仕もろく / \ 不召抱非常之心懸無之候而者不相濟候、先年も御家中馬を持候事ハ被 仰出候而、其後ハ馬ハ多く相成申候、馬もなく者軍用も欠候得共、愚意ニ奉存候ニハ馬よりも右ニ奉申上候従者之減候事を得与不被 仰出候而者相成間敷奉存候、上より従者之減候御触も候ハ、又馬之ことくニ相応に召抱可申候へ者此御世話も御座候様ニ仕度物ニ奉存候、只今之通ニ被差置候而者御家中之従者年々と相減可申候、当時者四・五百石取候輩無僕ニ而歩行仕候者有之候、是ハ減格者御吟味無之故ニ候、御鞍師之助十郎と申者鞍之御用ニ而加賀へ参、大聖寺之城下へも参候処、家中之面々無僕ニ而外を歩行候者ハ壺人も無之、或草履取鍵を持候而、鍵持壺人ニ而歩行いたし候輩も有之候や、ケ様なる事を年候而者御当地など氣之毒成姿ニ相成候(小文字)「古書ニも申候兵賦之事ハ常々能召抱置不申候而者軍用ニ立不申候、孫子ニ経者常也と註仕候事至極之事ニ奉存候」

(朱書)

「御当地ニ而も東武のことく従者御改之事」

一愚意ニ奉存候ニ者如東都毎歳御家中従者之御改、乗馬之毛附等御吟味有之候ハ、可然奉存候、然共先御軍役之重き事を御家中へ急度不被 仰出候而ハ相成間敷候、御軍役御定有之候而も家督境又ハ御加増或減少其度每其知行高之御軍役之書付御渡無之候而者自ら惰慢ニ可相成候、其実迎も昔々之御軍役ハ難用候へ者、御家中不殘被改而御軍役之御定被 仰渡候而、夫より年々従者之員数等左ニ相認候ことく為書出、夫を本にいたして御軍役惣御人数を改置候へハ其年之惣人数相知候、御家中従者を懸て何万何千何百何拾何人と申事不相知候而者御軍用之精敷事ハ相見へ申間敷ニ候、御軍役書付改而被 仰出

候大意

何川一判

何村一判

(包紙の図)

何野何右衛門殿

「御軍役御定 何之誰殿」

(欄外)

覚

一高千石 此御軍役  
召連候人数拾六人程  
内

「此御書付ハ時之御軍用御司候方思召次第之事なれ共、如此其大概を不申上候而ハ御事相見不申候故ニ相認置候事、此外ニも色々被仰渡可然御事可有之候」

馬上壱騎自分共ニ弐騎

(欄外)

若党五人程

「御軍用司候御家中歟或ハ御老中方御列印程ニ無之候而者此御書付も重く奉存間敷候」

中間拾人程

此外ニ

小荷駄弐疋、此口付弐人

小荷駄付之者壱人

右之通召仕候者譜代ニ抱置、軍中江召連らるへく候、御定之人数相減候事ハ堅不相成候、持高御定より人数余計召連、或ハ従者之馬上多致候事ハ可為勝手次第候、其節者人数有合次第御扶持方可相渡候、武具・馬具等も召仕之人数ニ随ひ常々令用意候而急軍之節聊手支無之様可被相心得候

右之通之御軍役之書付銘々ニ相渡、尚又叮嚀ニ申聞せ、幼少之輩ハ親類差添候歟、或ハ介添ニ其家之召仕差添御軍用役所ニ而被 仰渡候而此事信実ニ大事ニ思ひ込せ不申候而者難相成候、過言之至極ニ候へとも六拾壱万九千石之地を被成御拝領ながら此兵賦之大事を當時之

但持高人数よりも武具・馬具余計嗜置、戰場ニ而も武具・馬具損し候節も其差支無之様可被心得候

ことく緩かせニ被成置候事(小文字)「但此御軍役之書付ハ御黒印同様ニ麻上下着、謹而奉請取候程ならてハ大切之儀軽々敷相成候間、至而重き事ニいたし度御儀候」公義ハ勿論之儀、京都へ之御恐れ有へき御儀ニ奉存候、往古之郡県と違今ハ封<sub>邊</sub>封<sub>邊</sub>ニ而日本國中江諸侯を配り候而其国々之兵賦を無油断為御守被成候事なれハ、是ハ勝る重き事ハ無之候、然るニ此事ハ二段ニ相成、只座席之上ニ而備立之絵図を書せ爰ハ手薄キかしこハ厚しなと申類、誠ニ其利有かも知らねとも先ハかた腹之痛き空論ニ候、尤御人数立少しハ致置不申候而者難成候得共、大事之従者之積り事こまかになけれハ兵を精敷するとハ不被申候、座敷之上ニ而一枚絵図相認候而利口ニ申なし候へは何も知らぬ者は尤之様ニ被存候へとも、実は何之益ニも立不申候、左様成るを諺ニ申候而座席兵法畑水れんと申候、<sub>理</sub>利<sub>理</sub>は聞へた様なれともすハといふ時ニ至わさニ懸り何一ツ用ニ立不申候、一盃ニ申上候ハ、古書ニ御座候通危き事ハ疑敷ニ任するより危きハなしニ而、御軍用

一高百石ニ長柄鎗壱本・鉄砲壱挺ツ、常々嗜置可被申候、右之割を以千石者長柄鎗拾・本鉄砲拾挺、壱万石者長柄鎗百本・鉄砲百挺之積りを以其高ニ応し致所持置、御用之節可被差出候

但鉄砲之玉目ハ三匁五分より四匁五分迄、鉄砲之玉目大却成分ハ此割を以筒数少く候而も不苦候、長柄鎗者弐間より壱丈程なるへし、或長柄鎗揃候ニも不及、数鎗ニ而或ハ十文字大身鎗・鑰子鎗之類ニ而も不苦候事

一御家中召仕之者并乗馬・武具・馬具等之御改不時ニ可有之候間、無油断可被心懸候事

年号月日

何田一判

何山一判

<p>を司候者を御撰被成候事薄き故ニ不都合成事も出来仕、其事を知るも知らぬも只笑へハ能能ニ悪口申候、其源者信実ニ思ひ入候御人なく大事之儀を相互ニ讓合候様ニ而五月時分之弓之様ニくれ／＼と成強請悪敷いたしかたのなき様ニ相成候、惣而 公義ニ而者少々之事ニ而も御老中方、若年寄衆、寺社奉行、夫より祐筆ニ至迄御用懸り有之候、右故ニ物每一筋ニ成御老中方御独之御決断ニ而何方迄も進申候、然るに御当地之儀者一筋ニなくてならぬ大事之御軍用之儀御<sup>(所力)</sup>評ニも相成、御祐筆之類色々と了簡まち／＼之儀申上候故ニ御役人方ニも御迷ひ生し御不決断ニ相成候</p> <p>一従者召連候御定も可有之候へとも、是も如此大概を不相認候而者其利不相見候故ニ左ニ相した、め候、勿論是又其時之宜敷可有之候へハ、是を御用被成候事ニ而ハ無之候、其大概を</p>	<p>一高三百石 六人連 三百九拾九石迄</p> <p>四百石より鑓式本なるへし</p> <p>一高四百石 七人連 四百九拾九石迄</p> <p>一高五百石 八人連 五百九拾九石迄</p> <p>六百石より鉄砲有へし</p> <p>一高六百石 九人連 六百九拾九石迄</p>	<p>若党貳人 鑓持壹人 具足持壹人 口取貳人</p> <p>右同断 但鑓式本</p> <p>若党三人 鑓持貳人 具足持壹人 口取貳人</p> <p>若党三人 鑓持貳人 具足持壹人 鉄砲壹人 口取貳人</p>	<p>自分馬</p> <p>自分馬</p> <p>自分馬</p> <p>自分馬</p>
<p>相認候 御軍役人数召連候大概</p>			
<p>一高百石 貳人連 口取壹人 御借渡馬 馬壹疋 百四拾九石迄 口取壹人 都而召連候中間三人 具足持壹人 鑓持壹人</p>	<p>一高七百石 拾人連 七百九拾九石迄</p>	<p>若党四人 鑓持貳人 具足持壹人 口取貳人 鉄砲壹人</p>	<p>自分馬</p>
<p>一高百五拾石 三人連 口取壹人 御借渡馬 馬壹疋 百九拾九石迄 刀さし壹人 都而召連候者 中間鑓持 四人 具足持・口取</p>	<p>一高八百石 十壹人連 八百九拾九石迄</p>	<p>若党四人 鑓持貳人 具足持壹人 口取貳人 鉄砲貳人</p>	<p>自分馬</p>
<p>一高貳百石 四人連 口取壹人 御借渡馬 馬壹疋 貳百九拾九石迄 刀さし壹人 都而召連候者 鑓持壹人 五人 具足持壹人 口取貳人</p>	<p>一高九百石 十三人連 九百九拾九石迄</p>	<p>若党四人 鑓持貳人 具足持壹人 口取貳人 鉄砲貳人 支配人壹人 此鑓持壹人</p>	<p>自分馬</p>

一高千石 十六人連	若党五人 馬式疋
持籠壺本	長柄式人
馬印壺本	持籠壺人
是ハ具足持・口取	口取式人
中間之内ニ而持候	具足持壺人
	鉄砲式人
	従者馬上壺騎
	口取壺人
	籠持壺人

此外ニ小荷駄有へし

右之割合ニ而従者召抱置、前ニ相認候百一之法を以百石取之士ハ中間壺人屋鋪ニ差置、残六分但壺人知行所之百姓を用候へハ、高千石ニ而者十人面前ニさし置、残六人知行所之百姓を用ひ、壺万石ニ而者百人御城下屋敷ニ差置、六十人程知行所より召連候へは当時御家中諸士以上之輩江被下候出高四拾万石程と見候而、此従者六千四百人、士以上之面々大概千人程、手代・御足輕・御中間之類式千五・六百人程ニ而、都而一万ニ及申候、大坂御陣御人数壺万程ニ馬上千騎程ニ相聞候、前ニ相認候千石十六人連馬上式騎之割ニ而大方能符合仕候、右ニ相認候従者之積り六千四百人程之内四分六分と割分、六分ハ御城下屋敷々々ニ差置、急変を守、四分者知行所ニ差置時は三千八百四十人程御城下ニ従者有候、二千五百六十人程知行所ニ差置候心得ニ候、左候へ者御城下ニ罷在候諸士千程、手代・御足輕・御中間式千六百人程、従者三千八百四十人程、都而上下七千四百四十程御城下ニ罷在候、左候へ者如何様成急変有之候而も御手をふさげられ不申候事ハ無之候、何程能備立をいたし尤成利有之候而も、諺ニ申候無き長刀ハふられ不申候、御城下ニ人さへ有之候へハ備立も何も入不申候、御城下之人数被減候事ハ御心付無之事は程「天下之御大事を被思召候ハ、名古屋ニ御人数之有之候様ニ奉存候、近頃者追々定府も被 仰付候へとも非常

之事を奉存候而ハ恐入奉存候」上之御大事ハ無之奉存候、如何様成險之地を得候而も險阻計ニ而人かなければ不相成、如何様成名城ニ而も城計ニ而人なければ守られず、名将ニ而も將計ニ而人数なければ戦かたく、攻守何を以か人なくて可相成候哉、誠ニ名古屋ハ天下之咽喉ニ而、西国三十三ヶ国之大関所ニ而、其御場所ニ人数之減候御事ハ御家之事計にあらず、天下之御為ニ不可然候哉ニ奉存候、御軍用に関候面々只向より來ル敵と計心得て肝心之御膝本之空虚ニ心付無之見へ計之御軍用を申候事氣之毒ニ奉存候、惣而近頃ハ定府も多く相成、或ハ十年詰と申候而家内之者も召連江戸江引越多く相成候、御大家之事故ニ御志たる事ニ而も有之間敷候へ共、詰る所ハ名古屋御城下ニ御人数之減候基ニ而宜敷事ニもあらず、徂徠問答書ニも大名之家定府之害を申候事有之候、士ハ其国其在所ニ不差置候而ハ軍用ニも難相成、江戸定府ニ成候而わつか二間・三間之長屋之内ニ而そたち候人ハ立廻りハ成程能様なれとも、柔弱ニ而呉服屋之売子之様ニ相成候、年頃ニ成候而もろく／＼駈走りも得不致、色青さめたる士ニ御座候、又在所ニ而産レ候者ハ七ツ八ツよりもはや野山を駈走り殺生をいたし候故ニ自然と丈夫ニ而、十二・三ニも成候へハ五里・十里之道も苦にせずニ歩行いたし候故、成人ニ随ふて筋骨も丈夫ニなり、つよき働、重き物も常に持候故ニ誰教ね共武芸も心得軍用ニ立候、狭き長屋之内之定府ハ前ニ申通りなれハ非常の用ニハ難立候、古き家之大名衆ニハ屋鋪之長屋を小屋／＼と唱候事有之候、是ハ全陣屋小屋之心得ニ而候、左候へハ其小屋ニ婦人を差置へきいわれ無之候、其上江戸ハ火事多き事なれハ定府多く候へハ家内の足弱ニからまれ候而火を防く事も不相成、肝心之主人を守護する事も自と怠り候、士ハ在所ニ差置て一年限ニ交代為致候より能事ハ無之候、士ハ定府を為致江戸ニ差置候程東都之事を見習ひ質素の事を忘れ華美之風ニ移り候故、軍用ニハ害多

く候と申候、又井伊掃部頭殿家中ハ定府之者ハ出軍之供不相成候定ニ而、定府ハ甚以嫌ふ事ニ而、又定府之士ハ軽き者迄も鄙志之候由、東都之屋敷にても屋敷内を袴・羽織着用之士ハ召仕候若党・中間ニ至る迄片寄下座いたし、肩衣着用之士ハ屋敷内ニ而行違ふても時宜を不致候由、是ハ在所者ハ皆袴・羽織ニ而歩行、定府之者ハかたきぬニて候故、肩衣を懸候士ハ定府者ニ而出軍之供を不致候士故ニ軽き者迄も除け物ニ致し候由、如此事ハ古き家之儀天下之御先備も被致候事なれハ先祖直政以来心有て定め被置候事と相見申候、尤武備ニハ左も有へき事ニ奉存候

(朱書)

「御家中御軍用ニ召連候人数毎歳書付ニ而申達候事」

一御城下之人数さへ候へハ急変有之夜中ニ異国船相見候注進来り候而も俄之出張も相成可申候、万事ニ付御大事ニ奉存候事ハ名古屋ニ御減格後ハ御家中ニ従者なき故ニ御手薄ニ成候、御家中一統改而御軍役之御書付相渡り、夫よりハ親ハ隠居ニ而倅へ家督無相違被 仰付候而も新ニ右御軍役人数之書付御渡し、或ハ増減ニ付而尚更其高相当之御軍役御書付御渡しニ而、毎歳三月召仕之者之出代り相濟候上ニ其主人々々より左之通之書付を御軍用役所へ為出、不殘従者之書付揃申候上ニ、其年之御軍用之御調ニ懸り御軍帳を仕立、惣御人数御家中従者迄懸何万何千何百と、或ハ乗馬何千何百、小荷駄馬何千、惣ノをいたし一組切ニ小分を致、五月迄ニ御軍用帳為致出来候而、五月節句ニ差上候様ニ仕、其年之御軍用帳 御前ニ一帳、御軍用役所ニ一帳、年々如此相成候ハ、  
(小文字)  
 「此御軍用帳 上ニ御覽被遊、御覽相濟候上、其事御軍用役所より銘々へ申通し候ハ、自と従者も馬も減シ申間敷候」此以後年を経候而も怠りなく非常之事可有之

候、左もなく此通ニ而被差置候ハ、是より以往御家中勝手次第ニ可相成候、此事ハ御軍用之節制之大一之儀ニ奉存候、毎歳三月召仕出代り相濟候後ニ至り御家中より御軍用役所へ差出シ候書付之振合大概左之通

(包紙の図)

「軍中江召連候人数書付

高千石	何之誰
-----	-----

一高千石	何之何右衛門
------	--------

召仕之者

生所尾張国何郡何村

拾三石	譜代 何田何助
-----	---------

三人分	当年何歳
-----	------

宗旨ハ浄土宗ニ而何郡何村何寺旦那

武芸馬術心得罷在候、戦場江者馬上ニ而召連、常道中往来或ハ他所江使者ニ遣し候節者鎧を為持候、尤鬩斗目着用為致候

生所——

拾石	譜代 何野何兵衛
----	----------

式人分	当年——歳
-----	-------

武芸太刀を心得罷在候	右之通
------------	-----

生所——

七石	譜代 何村何蔵
----	---------

式人分	——
-----	----

武芸弓を心得罷在候	右之通
-----------	-----

生所——

金六両	当三月 何山何左衛門
-----	------------

壹人分	召抱候 当年何歳
-----	----------

武芸鉄砲を心得候	右之通
----------	-----

生所——

金五両	当三月 何川何八
-----	----------

壹人分	召抱候 当年何歳
-----	----------

武芸鎧を心得罷在候	右之通
-----------	-----

中間拾壹人

右中間拾壹人之内六人者屋敷ニ差置、五人者

知行所百姓を召連候

馬貳疋

鹿毛何歳

青何歳

外二 小荷駄付 中間四人  
小荷駄 馬貳疋

右小荷駄付中間四人、馬二疋共ニ知行所より召連候

ノ惣人数廿人、乗馬・小荷駄馬共四疋

右之通相違無御座候、若無余儀訳ニ而暇を遣候歟、或は病死等仕候ハ、其趣可申達候、召仕明跡三ヶ月を経候而も相応之者も無之候ハ、可申達候、乗馬ハ貳疋之内壹疋引替候而厩明候事ハ三ヶ月を経候ハ、可申達候、若病馬等致候歟、無余儀訳ニ而厩明候ハ、早速可申達候、以上

——三月

(小文字)

「但從者之充行を記候事ハ毎歳正月諸大名之侍帳 公儀ニ而御改有之候、則其侍帳ニ右之通知行高・切米・扶持等も書き候事故、右ニ准シ可然候、從者充行を書き候ハ、主人之高相応ニ扶持切米を遣し不申候而者不相濟、其上外ニ者無之事ニ候へ共御当地之風となり、地方ニ而も取廻し候者ハ召抱候初より其事を為申聞切米を格別ニ減し候事有之候、知行所之百姓より賄賂有之事を主人よりも申聞、夫故に切米を少くても相勤候など申事歎ケ敷事ニ奉存候」

毎歳三月書付を為差出、從者迄も御軍帳ニ記御家中不殘之人数を調候事ニ成候ハ、当時之不宜風俗も自と相止、譜代之者を召仕候事其家之飾と心得候様ニ向かわり可申候、又一季居之若党ニ而も上の御帳ニ留り候へハ自と不埒成事も仕間敷、支配人も前ニ相認候様なる實に主之為を不致、自分之利益耳ニ走り候事も不仕候、又主人も輕はつミニ暇を遣し候事も難成候、左候へハ自と家来は主人之為を不

致候而者難成、御家中勝手も自と直り可申儀ニ奉存候、古書ニ申候制有兵ハかたく制なき兵は敗ると申候事ハ戦闘之場之事ニ申なし候へ共、全左様之事計ニあらず、常ニ能節制致さねハなりかたく奉存候、御家大分之御人数ニ候へとも、常平生之時ニ能御組分を被成、御家中從者ニ至る迄事こまかニ御念入れ置れ候へハ夫程之事ハなくてハ叶不申候、御家中從者・馬之數・武具改迄致候事も節制ニ候、從者迄も武芸を為勵候事も節制ニ候、御家中召仕之人数高書付ニ召仕之者之武芸を相認候事ハ、若乱軍ニなりてハ從者小者・中間なりといへとも上之御大事を可奉救も不知候へハ、無油断出精為致置たき事ニ候、或ハ其時之様子ニよりて鎧之達者なる者を揃て鎧備を作りて突戦可仕時もあり、或ハ高場に備て弓の達者成者を揃て射立させ度時もあり、又は敵之高之ニ備て味方目下ニ見おろし敵は我がさにかゝりておしおろしの鬨を心懸る事有、如此時は鉄砲之達者成ものをすくり下より打すくめたき事も可有之候、左様成時ニ至常々其芸を申達置候へは御家中之從者を携て用る利有、又從者之芸能御軍帳ニ相認候上ハ、たとへ無芸之者ニ而も其芸を不習はなりかたし、是又人を進むの一助にて、其実は大きく申候ハ、上之御為其備之貫目を重く可致為なり、御家中之面々ハ不及申從者迄も武芸にはまり候へは悪敷事も先は不致候へ共、芸能之御世話薄きより三味線・浄瑠璃ニ相成候、此節大勢之御家中之若き輩八分通り江戸歌之三味線に成行候事歎敷奉存候

(朱書)

「御家中從者迄も普代ニ召抱候様成由ニ仕度奉存候事」

一東都愛宕下天徳寺へ御当地医者原榮春と申候者參詣仕候処、無程法事済候間、夫迄見合呉候様ニとの事ニ而、其内ニ本堂へ出て法事之様子を見候へは、左之方ニ上下着用之士三人、右之方ニ士四人、堂之縁ニ中間七人程相話、読經相濟、左之方

ニ座し候士より段々焼香をいたし、縁に居候中間ハ鳥目を紙に包、位牌ニ備、拝礼を致し、何れも甚愁傷之躰、中間ハ其縁之上ニ伏て其涙縁ニこほれ候、余りけしからぬ歎故ニ承候へハ長門之松平大膳大夫殿之用人役之由、今日初七日ニ而、此法事を為相濟、明日何れも長門へ出立仕候、知行八百石程取候人ニ御座候、中間ニ至る迄皆譜代者故ニ如此ニ候と申候よし、或ハ前ニも申上候御鞍師助十郎加賀之大聖寺へ參候処、其所之者咄候由、前々式・三百石程取申候士若党・中間兩人召連片ケ輪士屋敷一方ハ川之処ニ而若キ士兩人と及口論、兩人して士を切倒し候へハ、草履取主人を肩ニ掛其所之屋鋪へ入、其趣を申し、其内ニ若党ハ若キ士式人を切結候、其所へ中間ハ主人を頼置、直ニ出て若党・草履取兩人ニ而右之主人を切殺し候若キ士式人共ニ討取申候由、是皆譜代者故ニ先途之用ニ立候、御家ニ而も御軍用之大事を奉存候ハ、從者迄も譜代ニ召仕候様ニ相成、一季抱無之様ニ仕度候、御家中ハ勿論從者迄も武芸達者ニ仕候ハ、是程御軍用ニ宜敷事ハ無之候、尤備立等之利害も候へ共、是ハ其時ニ取ニ・三度も広き下屋鋪内ニ而も立て見候得者銘々之立所も相知れ、侍大将能々為申聞、進退・懸引・合図・約束等教候へ者相成候へ共、備に立る士之手ニ覚え有之候事ハ容易ニハ出来不仕候、尤治世之武芸稽古心得と戦国とハ違候事なれ共、夫ハ其時之事、先太刀・鎧・長刀・乗馬・弓鉄之類ハ士之不習しては難成事ニ而、百姓の鋏・鎌ともし事ニ候へハ無油断出精為致度御儀ニ候

(表紙)

「五五七六

赤心秘書 三」

赤心秘書第三目錄

一松平左近将監殿御旗本衆之武芸御取立之事  
 一抜群之者有之候而も夫を見出し候人無之候事  
 一御賞美之品之事  
 一五十人組水稽古、古よりハ鎗稽古ニ利可有之事  
 一揚火合図火之間遠近之差別之事  
 一鉄炮之利害常々稽古之心得之事  
 一出張行軍之体道中行列之如く候事  
 一兵法雄鑑之事  
 一出張御纏無之事  
 一行軍之心得之事  
 一出張之節山田河原ニ幕張出来等之事  
 一出張之節人数立小屋割等之事  
 一高須御住居替并尾州御城下御要害御備之事  
 一出張之節御弓備無之事  
 一出張ニ付方角之違行軍之里数間違之事  
 一出張ニ付一陣二将之意ニ成候事  
 一出張ニ付小屋取建之事  
 一異変之節御家中從者之事并熊谷宿騒動之刻忍長州応変武備之事  
 一尾州御城下并宿之番所木戸警衛之事  
 一尾州御城下御固筋之事  
 一天下之御大事を 思召、御国御嚴重ニ御守護之事  
 一巾下松林紅葉矢来辺空地草高之事  
 一巾下武士屋敷町家火災用心之事  
 一批杷嶋橋詰之事

(朱書)

「松平右近将監殿御旗本衆之武芸御取立之事」  
 一前々江戸表御旗本衆武芸怠り被申候而遊芸ニ相成候、其事を時之御老中松平右近将監殿御聞及ニ而、殊之外御心痛ニ而、御旗本之武芸之薄らき候事ハ天下之御ニ甚以不宜之旨仰有之、其後旗本衆嫡子・二男・三男迄密に芸能之輩御吟味有之、一度ニ百五十人程被 召出候、右之内三十人程ハ親之勤切、或ハ人品宜ニ付被 召出候旨ニ而、其余皆御書付ニ武芸之事を書出



しニ而鎗を出精致候ニ付被 召出、或ハ弓を射候ニ付被 召出、馬を乗候ニ付被 召出候旨ニ而、皆其芸之事を以罷出候、夫より御旗本衆芸能格別ニ而勵候、座席之上ニ而書物を読候事者左程ニ難儀成事も無之候得共、武芸ニおゐてハ強く面にても突れ候へハ齒も浮、口中もはれ食事も難給、胴を強く突れ候へハ腕腑もよれ上り候様ニ成、仕合ニハ怪我も出来仕候、鉄炮も小筒ハ左程苦ニも不成候へ共、玉目之大き成鉄炮ハ頭痛もいたし氣も昇り候、強弓を引候得ハ極て衄出、馬術も色々せつなき物ニ候、然れ共武芸之事ハ外之芸能と違ひ格別ニ御眷等も可有之候儀故ニ出精仕候、然るニ御当地ニおゐてハ武芸ニ而被 召出候事前ニも申上候通御弓役之外ハ無之候故ニ諸人実ニ身を入候事無之候、是ハ御軍用之御手薄ニ成基ニ而不宜御儀ニ奉存候、他所ニハ何芸ニ而も能いたし候者ハ其芸能ニよりに昇進をもいたし、二男・三男ニ而も召出有之候故出精も仕、芸者も出来仕候、明倫堂御取立候後ハ尚々武芸ハ薄らき申候、孫子ニ申候石を以て卵ニ投るものハ虚実是也と御坐候、是ハ石ハ能練て節制之有武芸之達者なる士を揃而備たるニ譬へ、卵ハ節制もなく武芸もしらぬ士を備たるニ喩へ候、卵と同じ様成白き石を大きさも卵程ニ摺両方之手ニ持候へハ何れたまこ何れ石と難見分候得とも、両方より打合するといなや卵ハ微塵に打砕け石は本之如くニ候、敵味方備を立て何れ勝何れ負るとも不相見候へ共、右之石と卵との如くニ而武芸もしらす節制もなき兵は直ニ打負る事必定ニ候、御軍用を勤る輩此大事をしらすして備立之利害を而已申候事氣之毒仕候

(朱書)

「抜群之者有之候而も夫を見出し候人無之候事」

一先達而も諸芸抜群之者ハ可申達旨被 仰出

も有之候、尤何芸ニ而も群に拔出候者ハ先ハ稀ニ候へ共、爰ニ申上度事ハ群ニ拔出たる程之者を見出し候人無之候、是ハ其頭も群ニ拔出たる人ならてハ其者之衆人ニ勝レ候事も相知不申候、諺ニ申候蛇の道ハへびがしると申如く、其道ニ入らざれば其人之芸能之勝レ給事も見出し不被申候、何程抜群之者有ても夫を見出して御用ニ達る人無之候而ハ皆隠れ申候、或は又何芸ニ而も達候者ハ其頭上役江も媚を不求、氣促ニ而必過失有之者ニ候、夫故ニ尚更其芸能之事重き御役人方ニ通り不申候、私之存候者ニも宮脇仲ハ馬之上手ニ候、柴山幸左衛門ハ天文ニ達し候、右之者などハ其得手成芸を以て御仕ひ被成候ハ、誠ニ上之御為ニも相成可申候得共、宮脇ハ東御屋敷御側相勤、柴山ハ御普請方役割を相勤申候、東御殿御側ハ誰ニ而茂相勤り、御普請方役割も誰ニ而も相勤り候得共、宮脇程ニ能馬を乗候者ハ無之、柴山程ニ天学ニ心を懸候者も無之候、是等ハ誠ニ群ニ拔出たる芸能ニ候へ共如此埋レ申候、私之奉存候内ニも如此兩人も有之候得ハ、莫大之御家中能御吟味候ハ、様々之芸能ニ達候者も可有之候、重き御役人方より実ニ御吟味無之候故ニ皆々志を不得罷在候、三略ニ氣を含む之類各其志を得ん事を願ふと有之候得ハ、其人々之得手たる所ニ而御用ひ被成候ハ、誠ニ御用ニ立可申候、宮脇仲ハ御厩ニ被差置、柴山幸左衛門ハ天文所等も御取立、折節ハ京都江も被遣、書物ニ而も多く御下被成候ハ、御当地ニ急度天文も出来可仕候、三ヶ之津ニ相続候程之御城下何芸ニ而も御家ニ無之事ハ無御座候程ニ被成置候事御手厚ニも奉存候、三略十二能之内ニ將たる人ハ能人を納ると有之候、注ニ人を納るハ衆人之材を愛してあまさすいれ用る之儀也、楠正成か泣男杉本左兵衛といふ者を抱畢ニ勝利を得、異国ニ而ハ孟嘗君

狗の皮を冠りて盗人をする事を得たる者、鶏の真似を能する者を以て大難を通れたる如き事有なれば、文武之事のミニ非す能其事ニ通達いたしたる者ハ召抱被置候ハ、何事その御用ニハ立可申候、惣而一芸有者ハ必其人<sup>ノ</sup>疵有物ニ候、其疵よりハ其芸を賞して召仕度ものニ候、昔之人ハ其芸能を賞美して其人<sup>ノ</sup>之過失を免して非常之用ニ可立といたし候、今之人ハ何程芸能有者ニ而も少し過失有れば直ニ捨て仕廻様ニ成候、是ハ只当分同前之事ニ成て異変之時<sup>ノ</sup>之心得なきより如此相成候、武備之心懸なき者<sup>ノ</sup>国務を執候得ハ芸者ハ多く隠れ果申候、御当地ニ而も他所をしらぬ輩ハ他国ニ芸能有事をしらぬ故ニ御当地程ニ芸者<sup>ノ</sup>之有所者なきと心得候得共、芸能<sup>ノ</sup>之有人ハ必御当地<sup>ノ</sup>之様成繁昌之所よりハ出ぬ物ニ候、他所<sup>ノ</sup>之大名衆ハ他国を尋て芸能<sup>ノ</sup>之有者<sup>ノ</sup>を其国へ引付候様ニ被致候、夫故小身<sup>ノ</sup>之衆ニも諸人ニ勝れたる芸能有<sup>ノ</sup>之候、文武ハ勿論<sup>ノ</sup>之儀、多く<sup>ノ</sup>之御家中<sup>ノ</sup>之儀ニ男・三男・懸り人迄も其得手々々<sup>ノ</sup>之芸能を御吟味被成候ハ、非常<sup>ノ</sup>之御用ニ立候芸術いくらも可有<sup>ノ</sup>之候、御当地ニ芸者多く可被成と被成間敷と只御役人方<sup>ノ</sup>之御<sup>ノ</sup>簡次第ニ何れへとも相成申候、当時ハ先ハ無<sup>ノ</sup>之事ニ候へ共、享保<sup>ノ</sup>之頃迄は諸大名<sup>ノ</sup>之家中其芸能ニ抜出て出身可致と思ふ者ハ其主人へ願候而諸国<sup>ノ</sup>を芸能習ニ出し是を武者修行と申候、当時ハ武者修行と申候得ハ其身ニ武芸能いたし他国<sup>ノ</sup>之人を敲き伏、突伏なといたし名を揚んと致候事<sup>ノ</sup>之様ニ申候へ共、夫ハ大間違<sup>ノ</sup>ニ而、其身他所他国<sup>ノ</sup>を懸難儀を致し、其主人<sup>ノ</sup>之為ニ他国<sup>ノ</sup>之芸を取来、其国<sup>ノ</sup>之為ニ致て其国ニ是迄なき武芸を殘候事ニ候、此故ニ他国<sup>ノ</sup>之士とも仕合も致し候事故ニ色々申候へ共、詰る所ハ其主人<sup>ノ</sup>之為ニ致し候事ニて、忠有士ニハ御当地ニ而も右<sup>ノ</sup>之如く丈夫成若き輩を他所他国へ遣し、他<sup>ノ</sup>之珍

敷芸を為学候ハ、是迄ニ無<sup>ノ</sup>之珍敷武芸御国ニ出来可仕候得共、中々他所<sup>ノ</sup>之芸能を被成御取候程<sup>ノ</sup>之事は扱置、御家中武芸能為御励被成候程ニも不相成、近年ハ尚更其事なく只一筋ニ学問<sup>ノ</sup>之ミニ成候而武芸ハ年々劣候事敷敷候、山本勘助か信玄へ申上候三ヶ条武教全書<sup>ノ</sup>之主本卷ニ有<sup>ノ</sup>之候、能人を見知へき事能人を見知、夫々<sup>ノ</sup>之賢き所をはかり知て其役可申付事賞罰を明かニする事兵法を常（小文字）「此常ノ字至而重き事」にする事此三ヶ条ニ候、御当地御役人も多く<sup>ノ</sup>之御家中夫々<sup>ノ</sup>之賢き所を見出し被成、其得手成筋江御入被成候而御用ひ被成候ハ、御用ニ不立者ハ不可有候、右ニ申上候柴山幸左衛門抔天文を被 仰付候ハ、此已後御当地ニ天学も被行可申候、六韜ニ天文武人ハ暦星を司り、風雨を考、時日を推、天心去就<sup>ノ</sup>之利を知る事<sup>ノ</sup>を司るとも御座候、是又御軍用第一<sup>ノ</sup>之事無てハならぬ御事ニも奉存候へ共、誰独推挙不仕敷敷奉存候

(欄外)

「親和ハ信州高島<sup>ノ</sup>之産、手跡よりハ弓か上手ニ而江戸へ出て弓指南<sup>ノ</sup>之積候処、存外ニ手跡行れ候、青木文蔵ハ芝<sup>ノ</sup>之肴売ニ而式百石被下評定所<sup>ノ</sup>之儒者ニ御座候、原田甚六ハ紀州<sup>ノ</sup>之産、鷹<sup>ノ</sup>之名人、有徳院様御供ニ而江戸へ参手駄木ニ居候鷹方与頭ニ御座候、三井孫兵衛・青木文蔵・原田甚六名人と申候、観世新九郎皆私加懇ニ御座候、夫故右き物語承候」

(朱書)

「御賞美<sup>ノ</sup>之品<sup>ノ</sup>之事」

一抜群<sup>ノ</sup>之者申達へく御触も有<sup>ノ</sup>之、或ハ武芸<sup>ノ</sup>之御覧一覽見分も候へ共、夫計ニ而ハ実ニ身を入申間敷候、実ニ武芸を御取立被成候思召ニ候ハ、前ニ申上候如く右近将監殿御旗本衆を被為励候通御家中<sup>ノ</sup>之輩嫡子・二男・三男ニ至迄密ニ御吟味も有<sup>ノ</sup>之、当時相勤候者ならハ御加増、嫡子な

らハ其親之格式ニ応して被 召出御扶持・御切米被下候歟、二男・三男之類ハ新ニ五十人・御歩行之類ニ御召出、毎歳十人程充も芸能之事を御書付ニ乗せて被 召出、或ハ芸術出精之御褒美百人程充も候ハ、御覧一覽無之候而も五・六年之内ニハ御家中之武芸百倍上手ニ可相成候、尤御褒美品も唯御目録等被下候よりハ其芸之道具ニ御金添被下候方宜候、譬ハ弓を出精之者は矢ニ御金を添、鉄炮を打候者ハ鉛・火縄之類ニ御金を添、鎗を遣ひ候得ハ稽古鎗ニ御金を添、太刀ハ木刀ニ御金を添、馬を出精之者ハ手綱・馬乗襦ニ御金を添、或ハしなへ・面稽古・長刀・居合刀之類を被下候ハ、金銀よりも面皮にもなり、最早その芸を捨る事も成間敷候、金銀計被下置候而者外之事ニ遣ひ捨候故ニ後ニ残り不申候、其道具を被下候へハ後ニ残り候故ニ、其子孫にも伝ひ候事故ニ、跡々迄心得にも成宜く、右ニ相認申候芸能ニ而被 召出候事も近頃ニハ重御役人迄只財用を専務とし御入箇之事のミニ成、手代より御取立之者専事を執候ゆへ決而出納を積り立候事故ニ行れ不申候、芸能之者或ハ百石、或ハ五十石充被下候而、一ケ年十人充ニ見七百五十石程ニ御座候、是を十年概候へハ七千五百石ニ候、七千五百石ハ余程之事ニ候へとも、其代リニハ拾年ニ士百人余計ニ成、芸能ニ達候者百人有之候へハ御大事之時之御防ニハ格別ニ可相成候、何事も物を不出候而人を為励候事ハならぬものニ而、非常之事を御考被成候而、上之御大事を思召候衆有之候ハ、此事もなくハ相成不申候、芸能之有士ニ禄を恪ぬ事ハ古書にも多相見候、士ニ芸を仕込御城之普請作事ニ念を入候事ハ上之御錠之鍛ひを念入候事と同事ニ而、此事薄けれハ上之御大事ニ拘候、然るニ此武ツともニ不行候事歎敷事之最上ニ奉存候、又御大家之事ニ候へ

ハ譬一年ニ七百石或千石余計ニ成候由、夫ニ而御勝手向御取直しならぬ物ニ而も無之候、左候得ハ御軍用にも宜候者ハ其事も申度事ニ奉存候、只鎖細成備立計にも有間敷候